

## 地学基礎，地学

### 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

#### 地 学 基 礎

##### 1 前 文

「地学基礎」は、地球環境の変化，日本の自然環境とその恩恵や災害など，日常生活や社会との関連を図りながら，地球や地球を取り巻く環境に関心を持たせ，科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する科目である。

今回が実施4度目となる，令和6年度共通テスト本試験の受験者数は456,523人で，昨年度の共通テスト本試験に比べ14,790人減少した。今回の「地学基礎」受験者数は43,372人であり，昨年度より302人増加し，理科①全受験者数の16.1%であった。また，平均点は35.56点（50点満点）であり，昨年度より0.53点上昇した。

評価に当たっては，共通テストの趣旨である，「大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し，大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし，各教科・科目の特質に応じ，知識・技能のみならず，思考力，判断力，表現力等も重視して評価を行うものとする。」に基づき，本年度の「地学基礎」本試験の試験問題について，14ページに記載の8つの観点により，総合的に検討を行った。

##### 2 内 容・範 囲

出題内容や出題範囲については，ほぼ教科書に準じた内容から構成されており，学習指導要領に示された範囲からおおむね出題されていたが，幾つか「地学基礎」の範囲外の問題が見られた。出題分野を詳細に見ると，「固体地球分野」が2問のうち1問は「環境・災害分野」にも分類でき，「地史・地質分野」が3問のうち1問は「環境・災害分野」にも分類でき，「岩石・鉱物分野」が3問のうち1問は「環境・災害分野」にも分類でき，「大気・海洋分野」が4問のうち2問は「環境・災害分野」にも分類でき，「天文分野」が3問であった。「環境・災害分野」に分類できる問題を取り出すと，5問，16点分に当たる。少ない問題数にもかかわらず，おおむねバランスの取れた構成になっている。問題によっては，教科書による取扱いに差が見られる題材もあるが，特定の教科書への偏りはなかった。

内容については，思考力・判断力・表現力等を要する問題が見られ，共通テストの問題作成方針にのっとったものであった。その他に，基礎的な知識を問う問題，計算問題など様々な問題が見られた。図を用いた出題については，教科書に記載されているものではない図を用いた問題もあり，それらには思考力・判断力・表現力等を必要とする工夫された良問となっているものもあった。

以下，幾つか気になった問題について述べる。

第1問Bの問3は，②について，火山ガラス（非晶質）について深く知らなくても，教科書には「石基を構成するもの」として記載されているので，正答を選ぶ上での支障はないが，「ガラス」だけでは，石基を構成する非晶質の固体というのが伝わりにくいと思われる。

第1問Cの問5は，グリパニアの記載がない教科書がある点が気になるが，グリパニアが分からなくてもシアノバクテリアが分かれば正答を選べる。また，（真核生物）（原核生物）の補助記載にも作問の丁寧さを感じる。

第3問Aの問2は、赤色巨星内部はヘリウムから炭素・酸素への核融合のイメージが強く、水素の核融合も続いていることを理解していないと正答を選べない。ただし白色矮星は核融合していないことを知っていれば、正答を選べるように選択肢は工夫されており、思考を要する問題であると言える。恒星のエネルギーが核融合によって生産されていることは教科書に扱われているが、赤色巨星と白色矮星の内部での核融合の様子は「発展」として扱われているため、問う内容や問い方について工夫を求めたい問題でもある。

第4問の問1は、活火山が新生代完新世以後に噴火したことのある火山であるとする定義が記載されていない教科書があるため、アの選択問題は適切でないと思われる。一方で、イの選択問題はマグマの性質と噴火様式との関係を問う基本的な問題であり、ウの選択問題は火砕流について問う基本的な問題であるため、アが分からなくても、イとウの知識から正答が導けるよう、選択肢は工夫されている。

### 3 分量・程度

大問4問構成で、小問数は15で構成されており、大問数、小問数とも昨年度と変更はなかった。全体としての分量は、妥当な量であり、多くの受験者は時間内に解答することが可能であったと思われる。

各問題の配点については3点又は4点で、適切であった。選択肢数は4択が14問、6択が1問で、昨年と同じであり、おおむね適切であった。また、観察、実験に関する問題は、昨年、一昨年度は2問であったが、本年度はなかった。科学的な思考力・判断力・表現力等を育成することは地学教育においても不可欠であるため、観察、実験に関する問題は出題していただきたいと思う。難易度については、A（平易）が9問、B（標準）が4問、C（やや難）が2問、D（難問）が0問と昨年と同程度と分析した。基本的な知識を問う問題だけではなく、知識を基に思考力・判断力・表現力等を必要とする問題も出題されたが、問題はおおむねA（平易）又はB（標準）であり、全体の難易度は昨年度と同程度である。今後も、難易度がA（平易）とB（標準）で全体の8割を占めるような問題を作成すれば、他の基礎科目とのバランスが取れるのではないかと考える。

以下、幾つか個別の問題について述べる。

第1問Aの問2は、S波の走時と緊急地震速報との関連を問う良問である。走時を導いた後、緊急地震速報との時差を求め損ねた受験者もいたと考えられるが、この時差こそが重要なのだというメッセージが込められているように思う。緊急地震速報はP波の情報を基にすると問題文にあるので、P波が到達してから緊急地震速報が配信されるまでの時間を考慮に入れた問題にすることも可能だったと思われる。

第1問Cの問6は、先カンブリア時代の出来事を問う標準的な問題であり、マグマオーシャン＝冥王代、爆発的多様化＝カンブリア紀、魚類＝古生代前期を踏まえると、比較的容易に正答を選べる。一方で、思考や類推では正答を選べないため、授業や学習の精度が問われた問題であった。

第2問Aの問2は、台風の危険半円や高潮について、思考を要する問題である。危険半円については教科書にほぼ記述がないが、他の選択肢の内容が平易であるため、正答を選べる。気象災害の視点を兼ねた良問であり、データに基づいた問題にすることも可能だったと思われる。

第2問Bの問3は、状態変化に伴う熱のやり取りと、地球放射の波長について問う、思考を要する問題である。海面から大気中へのエネルギーの移動として、潜熱と放射の2種類を区別して理解しておく必要がある。「電磁波」の語がやや難しく見えなくもないが、教科書の本文にはこの語を用いて説明されているため、正答を選べる。

#### 4 表現・形式

全体として、受験者に分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいものであった。形式については、「項目判断」(該当する項目を選択する問題)、「文章判断」(該当する文章を選択する問題)、「計算」(計算が主体となる問題)の3項目に分類した。「項目判断」は10問であり、昨年度より3問増加した。「文章判断」は3問であり、昨年度より3問減少した。「計算」は2問であり、昨年度と同様であった。また、図から必要な情報を読み取ることを求める問題があるが、工夫が感じられる問題と、工夫を求めたい問題とがあった。

以下、幾つか個別の問題について述べる。

第1問Bの問4は、火成岩の産状を問う基本的な問題である。図を用いている点は良いが、火山の一般的な地下構造を示しているだけで、知識を問うのみの問題になっている点に工夫を求めたい。

第2問Aの問1は、台風の移動と時間発展を地上天気図上で考える基本的な問題であり、中学校の学習事項により正答を選べる点に工夫を求めたい。

第2問Aの問2は、「下線部に誤りを含むものを」と問う形式であり、受験者が文章の下線部に注目して考えられるよう工夫されている。

第3問Bの問3は、いろいろな天体の見かけの分布をイメージする力を始めとした、思考を要する問題である。図における領域の広がり(角度)から、恒星の集団(星団)ではなく銀河の集団であると判断できる。小惑星は黄道付近に、恒星や星間雲は天の川にそれぞれ多く分布するので正答から除ける。図の設定と情報から正答を選ぶ点では工夫されている問題であると言える。一方で、「ある種の天体の分布」を示したものである図が、実際に肉眼で見えるかのように描かれている点は、受験者を混乱させた可能性がある。

第4問の問2は、火山灰の鉱物組成と湖底堆積層の特徴から正答を選ぶ、思考を要する問題である。地層の観察を題材にしていることは評価したい。aについて、斜長石を含むことを根拠にして同一の火山起源と判断するのは、確かに誤りで良い。しかし、aは、鉱物組成が異なるからといって同一の火山からの飛来を完全に否定できるのだろうか?という疑念を抱かせる可能性がある。bの「おおむね」という語の解釈には幅があり、正誤問題としては不適切な表現であると思われる。

第4問の問3は、軽石の漂流履歴から海流の速さの違いを考察する問題である。特に、軽石の漂流はここ数年間で何度か報道されているため実感しやすい。2地点を通過するのにかかった時間が両海流でまちまちであり、平均的速さの絶対値ではなく比率を求めさせている点が良い。亜熱帯環流の向きも知っている必要があるなど、複数の要素を関連させた良問である。

#### 5 まとめ(総括的な評価)

##### ○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストでは、おおむね「地学基礎」の教科書に準じた内容から出題されていた。基本事項の知識・理解の習得を始め、文章や図・グラフから必要な情報を読み取ること、地学的に事象を見つめて思考すること、自然災害や防災、地球環境の変化について考えることなどが求められた。高等学校では、基本事項の知識・理解の習得とともに、日常生活や社会との連携を意識させながら、科学的に探究するために必要な資質・能力を丁寧に育成する必要がある。このために、野外実習等の野外活動を頻繁に実施することは難しいが、教室や学校敷地内でできる実験・観察等は可能な限り実施していきたい。

## ○意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を、前述の8項目の観点から次のように要約し、今後の試験問題の作成に対し、提案・要望を行う。

- (1) 共通テスト問題作成方針を踏まえ、知識の理解を問う問題や思考力・判断力・表現力等が求められる問題の出題も見られ、バランスの取れた出題となっている。
- (2) 出題内容や出題範囲については、学習指導要領の定める範囲内であり、幾つかの問題が扱う内容については「地学基礎」の教科書に十分な記載がないものの、おおむね教科書に準じた内容で構成されていた。全体的にはバランス良く出題されている。
- (3) 問題で使用された題材は、教科書によって取扱いに差が見られるものもあったが、特定の教科書への偏りはなかった。
- (4) 観察に関する問題や図を使った問題は、普段の学習で経験してきたことを生かして考察する内容であった。また、日本列島周辺の自然環境や自然災害に目を向けるなど、共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が複数あり、適切であった。
- (5) 大問は4問構成で、小問数は15問で構成されており、各設問の配点については3点又は4点で、おおむね適切であった。選択肢数は4択が14問、6択が1問で適切であった。
- (6) 全体として、受験者にも分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいもので、おおむね適切であった。
- (7) 問題の難易度は昨年度と同様で、おおむね適切であった。
- (8) 得点のちらばりはおおむね適正である。

「地学基礎」の全ての領域について、真摯に学んで試験に臨んだ受験者が正答を選べるような配慮が認められた。また、問題文や選択肢及び図については、解答に過大な時間がかからないよう工夫されていた。

また、自然環境や自然災害を扱ったと受け止められる小問が多くの大問に見受けられた。昨年度と同様に自然環境や自然災害を扱った大問としてまとめて出題する方法もあり得るが、多くの高等学校での授業の様子を想像すると、今年度のように様々な分野、領域と自然環境や自然災害とをシームレスに扱って出題する方法は、受験者の学習意欲の向上や目的意識の確立に大いに寄与するものと考えられる。

さらに、探究学習の成果を問うことができる方法の一つとして、問題文や図をよく理解した上で考察することを求める問題が挙げられる。与えられた情報を把握、整理した後に再構築して新たな結論を導き出す力は、複数の問題において正答を選ぶ上で必要となった。

一方、高等学校の授業で実施されやすい観察、実験等の活動について直接的に問われることはなかった。共通テストの趣旨が、「(前半省略)…各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力、判断力、表現力等も重視して評価を行うものとする。」であることを鑑みると、観察、実験等の活動について扱う問題を期待する。

高等学校相当の年齢で「地学」を(科目として)学べる国は多くない。日本は地学を高等学校で学ぶ必要があると考えた数少ない国の一つである。もちろん、それは地震、火山噴火、気象災害といった自然災害と隣り合わせで日々生活していることが大きな理由であろうが、そこから地球や宇宙の壮大さや自然に対する畏敬の念が育まれ得るのだと確信している。授業においてこのことを肝に銘じたいと思うと同時に、より多くの高校生に地学を学んで欲しいと願う。

最後に、大学入学のための一次試験として重要な役割を担う共通テストの問題作成を通して、多くの受験者に地学を学ぶ意義と意味を伝えようと努めてくださった委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して、深く敬意を表したい。

## 地 学

### 1 前 文

「地学」は、「地学基礎」との関連を図りながら、更に進んだ地学的な方法で自然の事物・現象を取り扱い、観察、実験などを通して地学的に探究する能力と態度を身に付けさせるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育てる科目である。

令和6年度共通テストの本試験の受験者数は456,523人（昨年度より14,790人減）であった。理科②の延べ受験者数についても、「物理」「化学」「生物」の受験者が5,133人減少した。それに対して「地学」受験者数は1,792人で、昨年度より133人増加し、理科②全受験者数の0.5%（昨年度は0.4%）であった。また、平均点は56.62点であり、昨年度より6.77点上昇し、大学入学共通テスト開始以来最高点であった。

評価に当たっては、共通テストの趣旨である「大学への入学志願者を対象に、高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力、判断力、表現力等も重視して評価を行うものとする」に基づき、本年度の「地学」本試験の問題について、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

### 2 内 容・範 囲

出題内容や範囲については、学習指導要領の定める範囲内であり、おおむね教科書に準じた内容で構成されていた。小問別に見ると「地球の概観」に関する設問が2問、「地球の活動と歴史」に関する設問が11問、「地球の大気と海洋」に関する設問が7問、「宇宙の構造」に関する設問が6問であった。昨年度より「地球の概観」に関する設問が1問増加し、「地球の活動と歴史」が3問減少した。これだけ見ると偏りがあるように見られるが、「固体地球」「岩石・鉱物」「地史・地質」「大気・海洋」「天文」の5分野で分類すると、それぞれ5問、4問、4問、7問、6問となり、大気・海洋がやや多い傾向はあるが、全体的にはバランス良く出題されている。教科書によって取扱いに差が見られる題材もあるが、特定の教科書への偏りはなかった。

内容については、基本的な知識の組合せやその正誤判断、探究活動や観察、実験、野外実習や天体観測などを題材として、観察、実験や探究活動についての理解力や思考力・判断力・表現力等を問う問題、図表やグラフを読み取り、数学的处理能力や思考力・判断力・表現力等を問う問題など、共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が多くあり、適切であった。

以下、個々の設問について意見を述べる。

第1問は、観察や実験の結果をグラフや図を使い可視化することを題材に、多領域にわたる地学現象について小問で構成された分野横断型の総合問題である。「観察や実験の結果をグラフや図を使い可視化する」というのは、地球科学の理解の根幹であり、出題者の意図が明確に伝わる。それぞれの小問相互の関連性は低いが、二次元情報を三次元に復元することを題材とした昨年度共通テスト本試験の第1問と同様の試みは、「地学」の特性を意識させる上で評価すべき形態と言える。

第1問 問2は、グラフの読み取り方を問う基本的な問題である。かなり易ではあるが平均点を6割に近づけるにはこのような問題も大問中に1問は必要である。

第1問 問3は、与えられた実験データからグラフを補完し、完成した融解曲線から点Aの状態を考察させる良問である。

第1問 問5は、地質図上に走向線を作図し考察する問題である。教科書の説明部分だけではなく、探究活動にも触れていることが求められる良問である。

第2問 問2は、地磁気の視点から、オーロラと残留磁気についての知識を問う問題である。固体地球分野と気象分野が1問にまとめられている点が工夫されている。地磁気が逆向きという設定にすることで、思考する力を問う要素を入れたかったと推察する。しかし選択肢aは地磁気の逆転とは明らかに無関係なことから、このような設定にすることに必然性があったのかはやや疑問である。

第2問 問3は、日本付近におけるプレートの沈み込みと活火山の関係に関する考察問題である。日本列島の地下のプレート構造の立体的理解を基に、等深線を図から読み取り考察するという、地学に必要な技能を測ることができる良問である。

第2問 問4は、地震波の初動分布と余震の震央分布から、断層運動を考察させる問題である。正答率はやや低いものの、初動の押し引き分布と横ずれ断層との関係を理解した上で、探究活動を積極的に行った受験者が報われる良問である。

第4問A問2は、気温の鉛直分布とその成因の理解について問う知識問題である。cの文に関して、地表付近の大気を暖める理由が、温室効果にしか触れられておらず、伝導については述べられていなかった。よって正誤判定について戸惑った受験者がいたのではないかと推察する。正誤判定問題の文章表現については、より一層の吟味をお願いしたい。

第4問C問6は、黒潮の蛇行部分における、圧力傾度力と転向力がはたらく向きを、問題文や図から考察させ、海面高度の分布について判断させる問題である。「地学」で学んだ知識を活かして考察することのできる良問である。

第5問は、高等学校で「地学」をきちんと学習していることを前提とした出題が多かった。よって高等学校で「地学」を履修していない受験者が多いという事情を抱えた当科目においては、正答率が下がってしまったようである。しかし出題内容としては決して難問というわけではなく、「地学」で学んだ知識を土台とした上で思考させる良問が多かった。

第5問A問1は、惑星の視運動に関する問題である。順行と逆行についての定義の知識を問い、なおかつ一定期間の天球上における移動距離の大きさから惑星名を判断させる良問である。

第5問A問2は、惑星の視運動について、観察結果に基づいて確認できる内容について問う問題である。観察に基づいた出題とすることで、探究活動を意識した内容になっており評価できる。

第5問B問4は、主系列星の進化に関する問題である。恒星Pが大質量星であるということ来判断した上で思考する力を必要とする問題である。超新星は通常HR図上で示されることがないので、戸惑った受験者がいたと思われる。

### 3 分量・程度

大問は5問構成で、小問数は26で構成されていた。昨年度に比較して小問数が一つ減少したが、一つの小問の中で二つ解答する設問があったため、解答番号数は昨年度と同じであった。ページ数は昨年度同様30ページであった。図表やグラフを活用する設問は16問で、昨年度の19問から減少した。観察、実験や観測に関する設問は4問から3問に減少、計算問題は4問から2問に減少した。昨年度と比較して、思考力・判断力・表現力等を必要とする設問や計算問題の割合が減り、基本的な知識を基に思考・考察する設問の割合が増加したことや、問題文の長さや量も適切であったため、全体としての分量は妥当であり、受験者は時間内に解答することが可能であったと思われる。

選択肢数は4択が19問、5択が1問、6択が6問であった。昨年度は4択が26問、6択が1問であったことから、今年度は6択問題が大幅に増加した。しかし6択問題の正答率が4択問題と比較

して極端に低いということはなく，選択肢数の構成はおおむね適切であった。各設問の配点については3点又は4点が大半を占め，1問だけ6点の設問があったが，部分点が設定されていたこともありおおむね適切であった。

難易度についてはA（平易）が7問，B（標準）が17問，C（やや難）が2問，D（難問）が0問と分析した。今年度は正解を二つ答える設問が1問出題された。解答が一つではないことはより正確な理解が必要となり，難易度が高くなるが，二つのうち一つ正解すれば部分点が入るように配慮されていた。平均点は56.62点と，昨年度の49.85点より6.77点高く，易化したと言える。昨年度の本試験はA（平易）が7問，B（標準）が11問，C（やや難）が9問，D（難問）が0問と分析されているため，今年度はやや難の設問が減少し，標準の設問が増加した分，平均点が上昇したと分析する。今回，平均点が上昇したのは，図やグラフ，観察結果を分析して解答する考察問題や，計算問題が減少したことが一因であると考えられる。問題全体に占めるAとBの割合が8割程度に高まり，思考力・判断力・表現力等を必要とする設問数が適切に調整された結果であると思われる。

以下，幾つか個別の設問について述べる。

第3問C問6は，与えられた地質図から読み取れる事象について問う，思考・判断を必要とする問題である。地質図に関する探究活動を積極的に行った受験者であれば正解できる良問である。両方正解した受験者は少なかったものの，一つ一つの選択肢の理解は難しくなく，また部分点が設定されており配慮が感じられた。

第5問B問5は，年周視差と見かけの等級から絶対等級を求め，恒星の色からスペクトル型を推定し，HR図上の位置を考察する，思考・判断を要する問題である。絶対等級の定義を理解していれば計算の必要がないよう工夫がされており，HR図についての本質的な理解をしているかを見る良問である。

#### 4 表 現 ・ 形 式

全体として，受験者に分かりやすい表現が用いられており，理解しやすい内容であった。多くの設問に図表やグラフが用いられるなど，全体的に工夫が感じられた。

形式については，項目判断：該当する項目を選択する設問，文章判断：文章を選択する設問，計算：計算が主体となる設問の3項目に分類した。項目判断は16問あり昨年度より3問減少した。文章判断は8問あり昨年度より4問増加した。計算は2問であり昨年度より2問減少した。また，正誤の組合せ問題は3問あり昨年度より2問増加した。出題形式のバランスは適切である。

以下，幾つか個別の設問について述べる。

第1問 問1は，距離と年代のグラフより海洋底の平均的な速さを考察させる計算問題である。二つの海嶺の年代が微妙にずれていることで，近似直線を引きグラフの傾きを求める必要があり，作問に工夫が感じられた良問である。

第3問A問1は，造岩鉱物に関する基本的な知識問題であるが，グループ分けの図を選択肢にすることで，探究活動を意識した出題になっており，工夫が感じられる。

第3問A問2は，マグマの性質と噴火様式に関する基本的な知識問題である。会話形式になっていることで思考を誘導するよう工夫されており，主体的・対話的な学びを意識した設問となっている。

第3問A問3は，図4から温度と深さを読み取り，図3の $\text{Al}_2\text{SiO}_5$ の相図中にプロットさせ，安定に存在できる鉱物を考察させる問題である。日本列島周辺の地球科学的環境について，探究活動を意識した良問である。

第4問B問4は，氷晶の発達過程についての理解を問う問題である。グラフを見ながら考察でき

るようになっている点に配慮が感じられる。

## 5 ま と め（総括的な評価）

### ○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストでは、「地学」の教科書に準じた内容から、基本事項の知識・理解の習得を見る問題だけでなく、観察や実験の結果について、グラフや図から読み取り考察する問題や、グラフや表に受験者自らが表現し可視化した上で考察する問題も出題された。地学的な思考力・判断力・表現力等を見る問題が、様々な形式で出題されていた。高等学校では、基本事項の知識・理解の習得だけにとどまらず、観察や実験の結果をグラフや図から読み取り考察する力や、グラフや図に表現する力をしっかりと身に付けさせることが必要である。

### ○意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を、前述の8項目の観点から次のように要約し、今後の試験問題の作成に対し、提案・要望を行う。

- (1) 共通テスト問題作成方針を踏まえ、知識の理解を問う問題や思考力・判断力・表現力等が求められる問題が、バランス良く出題されていた。
- (2) 出題内容や範囲については、学習指導要領の定める範囲内であり、おおむね教科書に準じた内容で構成されていた。大気・海洋分野がやや多い傾向はあるが、全体的にはバランス良く出題されていた。
- (3) 問題で使用された題材は、教科書によって取扱いに差が見られるものもあったが、特定の教科書への偏りはなかった。
- (4) 探究活動や観察、実験、野外実習など、共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が複数あり、適切であった。
- (5) 選択肢数が6択の問題が6問あり例年に比べ多かったが、設問数、配点、設問形式はおおむね適切であった。
- (6) 全体として、受験者にも分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいもので、おおむね適切であった。
- (7) 設問によってはやや難易度が高いものも見られたが、全体の難易度は適切であった。
- (8) 得点のちらばりはおおむね適正であった。

今回は、「地学」の内容を確実に学習した受験者が、時間内に解答できる分量と内容になっていた。また、観察、実験、野外実習を扱った問題は、共通テストの問題作成方針にのっとり、探究的な学びを促す役割を果たすと同時に、学習者の興味を喚起する工夫がなされていた。

地学は総合科学であり、それぞれ分野の知識が様々なところでつながっている。第1問のようなテーマに沿った大問や分野横断的な問題は、地学の特性を感じさせるものであり、どんなテーマで出題されるのかが毎年楽しみである。今後も無理のない範囲で出題を続けて欲しい。

共通テストがスタートして4回目の本試験であったが、今回初めて5割台後半の平均点となった。出題内容は多岐にわたり、選択肢数が6択の問題も多く出題されたなか、5割台後半の平均点となる作問がなされたことは高く評価したい。今後も受験者の側に立った難易度、分量、全体のバランスを考慮していただき、平均点を6割程度にするための問題作成の工夫をお願いしたい。

最後に、各方面から寄せられた意見や要望を真摯に受け入れ、内容を詳細に吟味され、熱意を持って作問された問題作成委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して、深く敬意を表したい。次年度以降も引き続き意見や要望を積極的に作問に反映していただき、適切な難易度かつ良質な問題を期待する。